キャリア教育の一環で授業に組み入れ
事前の講義や話し合いで給水などレベルアップ

第9回オホーツク網走マラソンのスタッフ約1,100人のうち、農大生は3割を超えます。

大会前日の開会式では会場案内や整理を、また当日はスタートのランナー整列や出発時の激励、コース沿道では給水、ゴール地点では完走メダル渡しなどにフル回転しました。

この授業は5月から始まり、社会人基礎力について学ぶ講義、マラソン大会の概要説明や応援スタイルを自分たちで話し合いながら応援グッズを作成する授業など、9月末の大会本番と、振り返りやその後の教員との面談を含めると11回行われました。

学生のアイデアを応援に取り入れ

今年は自分たちで応援に使ううちわを作りましたが、大会前日にずらりと激励コメントやイラストが描かれたうちわを並べた写真を大会フェイスブックに投稿し、ランナーにエールを送ったのは学生から出たアイデアでした。またコロナ禍で声出し応援ができなかった2022年に「がんばれ」の声援を録音して給水ポイントで流しランナーを励ましたのも、授業の意見交換から生まれた試みでした。

同キャンパス・キャリアセンター事務課の関大輔さんは「学生が社会人として巣立つために大学として多様なキャリアプログラムを各学年向けに用意していますが、オホーツク網走マラソンは1年生が社会、地域と向かい合えるとても良い機会と考えています」といいます。

受け付けなど裏方の役割を理解

8月27日の北海道マラソンでは東海大学国際文化学部（札幌キャンパス）の地域創造学科がマラソンボランティア体験を組み込んだ科目を設けています。

授業の目的はボランティア体験を通じてスポーツ大会の運営のあり方や、裏方としてのボランティアの役割について理解を深めること。東農大とは異なり1年次の選択授業ですが、今年も例年と同じ約40人が受講し、大会のボランティアに参加しました。

授業は当日も含め6回。マラソンボランティアの役割、活動内容を学ぶ講義のほか、大会の協賛スポンサーから企業がどうマラソンイベントにかかわるのかを学修。また事前に給水実技を体験して準備や実際の手順を確認して、本番に臨みました。

指導する服部正明教授は「スポーツ学を専攻している学生が多く、スポンサー企業からマラソンイベントにかかわる目的などを直接聞ける機会は貴重。またボランティアでは前日の受け付けと当日の給水（今年はスポンジ）を体験することで、大会運営の幅広さを知ることができました。学生がランナーを励ましたのに、ありがとうと声を返してもらって、逆に自分たちが励まされたような気持になったと感想を述べていたのは印象的でした」と話してくれました。

2022年の北海道マラソンで初めて生徒が給水ボランティアに参加した札幌創成高校は、2023年大会では約250人が15.5km、17.5km、20.2kmの3地点で給水を担当しました。同校は生徒の社会で求められる力を育成するため、普段の授業に加えてボランティア活動への参加を積極的に勧めていますが、今年の希望者は昨年を100人ほど上回りました。

引率した齊藤貴彦先生は「教員側の呼びかけに加えて、前年に体験した生徒が『楽しかった』『ランナーに感謝された』と伝えてくれたことで参加者が増えたようです。マラソンボランティア以外でも、ゴミ拾いにスポーツ的なルールを加えたスポGOMI競技などにも生徒が参加し良い成績を収めていて、学校としてこうしたボランティア活動を推進しています」と話しています。

北海道マラソンで前日の大会受け付けボランティアをする東海大の学生

参加のハードルの低さを生かして

スポーツボランティアに詳しい二宮雅也文教大教授（日本財団ボランティアセンター参与）は、大学生や高校生のマラソンボランティア参加の意義を、社会の成員としての自覚を持つことに役立つと指摘します。

「大学生は意外に学外との交流が少ない。アルバイトでは雇用者から一方的に指示される。その点、マラソンの給水ボランティアはランナーに頑張ってと声掛けするとありがとうの声が返ってくる。ハイタッチもできる。若者は自分が社会に認められているという自己肯定感は少ないが、外で対等なコミュニケーションができることで、一種の自信となります」「ボランティアはスポーツ以外にもいろいろな分野があります。参加のハードルが低い給水ボランティアの経験を機に、例えば地域スポーツ、災害や障がい・福祉分野でのボランティアへも目が行くようになれば」といいます。